

琉球大学学術リポジトリ

沖縄の災害情報に関する歴史文献を主体とした総合的研究

メタデータ	言語: 出版者: 高良倉吉 公開日: 2009-02-27 キーワード (Ja): 沖縄, 琉球, 災害史, 地震津波, 異常気象, 歴史文献情報 キーワード (En): 作成者: 高良, 倉吉, 山里, 純一, 豊見山, 和行, 真栄平, 房昭, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, Takara, Kurayoshi, Yamazato, Jyunichi, Tomiyama, Kazuyuki, Maehira, Fusaaki, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/8987

沖縄における津波と「油雨」に関する伝承

赤嶺 政信

はじめに

本稿では、沖縄における災害に関わる伝承資料の中で、津波と「油雨」に関するものに限って資料の整理を行うことを主な目的とし、合わせて若干の考察を行いたいと考えている。津波に関する資料を整理・列挙するにあたっては、沖縄県域を沖縄島とその周辺離島地域（以下では、沖縄島地域と表記）、宮古地域、八重山地域の3地域に分けて行うこととしたい。

I 沖縄島地域の津波伝承

まず、沖縄島地域の津波に関する伝承を見てみよう。

事例1（旧美里村古謝村）

昔、美里間切古謝村に一人の塩焚があった。或る日海に出て海水を汲んで居ると、一尾の魚が浮きつ沈みつして居る。彼は何気なく此を捕へて帰り、ザルに入れて軒にかけて置いた。すると不思議なことにはそのザルの中から、微かに「一波寄するか、二波よするか、三波よするか」と云う声が聞えて来る。塩焚は不思議に思ひ中をのぞいて見たが、さきに捕った魚で外に何も無い。彼は益々怪しく思ひ、こんな魚を食っては大変だと考え、此を放してやらうと思って内を出た。然るに彼は途中で知人なる一人の無頼漢に出会った。何処に行くのかと聞かれたので、件の話をすっかりしてやった。男は聞いて手をたたいて笑った。「馬鹿なそんな馬鹿なことがあるものか、棄てる位ならその魚を私に下さい」と云った。塩焚はそれではと云って、その魚をやって帰った。此の男は甘い御馳走にありついたといそいと内に帰り、料理をして食べようとした。丁度その時、忽ち大津波がやって来た。近隣の人畜を残らず悉く押し流してしまった。【佐喜真興英 1982 : 203】⁽¹⁾

この話では、魚の名前は特定されていないが、後述のように、類話においては「物言う魚」⁽²⁾はザン（ジュゴン）とするのが多い。

事例2（久米島）

イービ（拝所の名称）は、ある年津波が来てすべてを流した時、母親を背負って逃げた老女の話がある。すてていったはずの赤子は石の上に寝ていて無事だったという。神の加護があったという言い伝えである。【久米島西銘誌編集委員会編 2003 : 588】

事例3（久米島）

昔、西の方から津波が上がってきた時、神がウルル御嶽でマヌ布のサージで祓ったら来なかった。【久米島西銘誌編集委員会編 2003 : 588】

事例2・3ともに断片的な資料に留まるが、事例2には親孝行を強調する儒教的粉飾が感じられる。事例3のマヌ布の意味は不明。

事例4（旧佐敷町）

アカングワーイユ（ジュゴン）が鳴くと、シガリ（津波）がくる。[佐敷町史編集委員会編 1984：76]

アカングワーイユのアカングワーは赤子、イユは魚の意で、ジュゴンの発する声が赤子の泣き声に似ているための命名だとされる[谷川 1986：102]。ジュゴンと津波との関係について語る話は、宮古、八重山地域にも多く見られる。また、津波のことをシガリとかシガリナミなどのシガリ系の言葉で呼ぶのは、沖縄全域に共通している⁽³⁾。

II 宮古地域の津波伝承

ここでは、宮古地域における津波伝承について見ていく。

事例1（多良間島）

大昔、ブナゼーという兄妹がいた。ある日、畑に出て仕事をしていると、南の方から突然、大きな波が押し寄せてきた。二人は慌ててウイネーツツという丘に駆け登り、シュガリガギナ（力芝）にしがみついて難を逃れた。助かったのは、兄妹二人だけだったので、二人は夫婦の契りを結んだ。最初に生まれたのはポウ（蛇）とパカギサ（とかげ）で、次にアズカリ（シャコ貝）とブー（麻苧）が生まれた。三番目に人間が生まれた。ブナゼー兄妹を祀る祠がある。[多良間村誌編纂委員会編 1973：50]

奄美・沖縄文化圏で、広く伝承されている兄妹始祖神話と津波が結びついた話である。後述する波照間島の神話でもそうであるが、兄妹始祖神話においては、通常はタブーである兄妹が夫婦となるためであろう、最初に生まれる何名かの子どもは普通の人間ではなかったと語る話が多い。「力芝」と注のあるシュガリガギナのシュガリは、津波を意味するシガリ系の言葉と考えていだろう。

事例2（多良間島）

ナベ・カマ類を海で洗うと津波が起る。[多良間村史編集委員会編 1993：324]

ナベ類、カマ類は、いずれも金属だとすれば、海の神が金属を忌むということであろうか。

事例3（伊良部島）

昔下地島に木泊り邑という部落が今の通り池の周辺にあった。或晩その邑の漁夫がヨナタマという魚を釣った。その魚の頭は人のような形で、体は魚に似てよくものを言うので、漁夫はあまり珍しいので、明日まで保存して人びとに見せて賞味しようと思って薪に火をおこしてこれを炙って乾かしていた。ところがその晩おそくなってから隣家で母親と添寝していた子どもが、急に大声で泣きだして、どうしても伊良部島に行こうという。夜中だからといって、母親がいろいろとなだめたり、すかしたりしても子どもはいつこきかず、ますます大声で泣き叫ぶので、仕方なく、母親は子どもを抱いて外に出ると、どうしたのか、子どもがしっかりと母親にしがみついてふるえていた。母親もどうしたのかと怪しく思っていると、遠い沖の方から、ヨナタマ、ヨナタマ、どうして帰りが遅いのか、という声が聞こえて来た。暫く立って、ヨナタマが言うには、自分は

今火の上へのせられて半夜も炙り乾かされているのだ。早く迎えをよこしてくれと答えてた。母子は身の毛がよだつほど恐ろしくなって伊良部島へ行った。人びとは怪しんでなぜ夜ふけに来るのかと問うと、母はこれまでのいきさつをしかしかと答えた。翌朝下地邑に行ってみると、一夜のうちに洪濤にのまれて、村中跡形もなく洗いつくされていた。母子だけはどういふご利益があったか、その災難を免れたという話である。【大川 1974 : 211】

「魚の頭は人のような形で、体は魚に似て」というヨナタマの形状からして、物言うその魚はジュゴンであったと判断していいだろう。柳田国男は、「物言う魚」という論文の中で、『宮古島旧史』から同じ内容の説話を引用したうえで、ヨナタマについて以下のコメントを付している。

一つの観点は物をいう魚の名を、この島ではヨナタマとっていたことである。ヨナはイナともウナともなって、今も国内の各地に存する海を意味する古語、多分はウミという語の子音転換であろうということは、前に『風位考資料』のイナサの条において説いたことがある。それがもし誤りでないならばヨナタマは海霊、すなわち国魂郡魂と同様に海の神ということになるのである。知らずして海の神を焼いて食おうとしたものが、村を挙げて海嘯の罰を受けたという語り事だとすれば、単なる昔話という以上に、もとは神聖なる神話であったかも知れぬ。【柳田 1989 (1932) : 457】

伊良部島には、怒った太陽が津波をおこすという、以下の話(要約)も伝えられている。

事例4 (伊良部島)

牧山の海の近くに部落があった。赤ちゃんを子守りしている娘が変な歌を謡うので、天から降りてきた太陽の神が歌詞の内容を聞いたら、「この子のお母さんが海に行って、毒のウニを捕ってきて、それで太陽の神を殺そうとしている」と子守りの娘は答えた。怒った太陽の神が津波をおこして部落を滅亡させた。【遠藤庄治編 1997 : 293】

つぎの事例は、1990年に筆者が採録した伊良部島の佐良浜にあるサトゥヌカン(里の神)の由来譚である。

事例5 (伊良部島佐良浜)

八重山のある所で津波の予報が出て、皆高い所に非難するようとお触れが出た。機織りをしている一人の娘がいて、母たちは逃げたが、自分はあと1寸ばかりで布が完成するというので機織りを続けていた。そこへ津波が襲ってきた。娘は高い木に登り木にしがみついていたが、とうとうその木は根こそぎ流されてしまった。母は、心のいい人たちの住む島に流れ着くようにと毎日祈っていた。その娘の乗る木は佐良浜の海岸(現在の港近く)に流れ着き、娘はすでに死亡していた。佐良浜の人々は、その娘をサトゥヌカン(里の神)として祀るようになった。佐良浜で祀られていることを知った娘の両親が島にやって来て、娘が祀られるサトゥから島の指導者(町長)を目指す人がいれば、必ず助けて選挙に当選させるようにと神となった娘に祈願をした。そのおかげで、そのサトゥからは多くの指導者が出ている。

つぎに掲げる事例は、1987年に旧城辺町友利において大正6年生の話者から筆者が採録した話である。

事例6 (旧城辺町友利)

ヤマトウの男が、津波のために部落が全滅したという話を聞いて、船で友利の海岸にやって来た。海岸で蛸をくわえてナカヤマという山にのぼっていく犬を見つけ、犬がいる

なら人間もいるかもしれないと思って、その犬の後を追った。山には、津波の難を逃れた女が一人住んでいた。その女は犬と一緒に生活しているという話であった。その女を好きになった男は、女の犬のかわいがり方に異常なものを感じ、嫉妬して犬を斬り殺し、女に夫婦となって友利部落の始祖になろうと話した。女は「その犬は私のトゥヌ（夫）であるよ」と嘆き、斬られたときの犬の血がその女の股にかかり、それ以来女性は月経が始まった。その男はヤマトウガン・シマヌヌシ（大和神・シマの主）と呼ばれンニーマムトウ（嶺間ムトウ）で祀られている。女は、住んでいた山の名に因んでアマリパーと呼ばれ、プスギビー（プスギは広げる、ビーは人の意という。始祖のことか）となり、別のムトウに祀られている。津波の水位によってできたと思われる線が見えるシンピツ（線引き）山というのが、友利部落の背後にある。

この話の類話が、峰間御嶽の由来譚として『琉球国由来記』巻 20 に以下のように記載されている。

事例 7

峰間御嶽 男女神。アマレホチ・泊主ト唱（友利村後峰ノ上ニ有）。

船路、且、諸願ニ付、城四ヶ村崇敬仕ル事。

由来。往昔、友利村後、アマレ山ノ下ニ僅成孤村有リ。或夜、四海浪アガリ、民屋致滅亡一村荒原ト成ル。然処、アマレ大ツカサト云フ女一人、逃波難、アマレ山ノ峰ノ上ニ草庵ヲ結び只独住居ケル。其時、大和人、平安名崎、宮渡ト云フ浜ニ致漂着、人家ヲ尋行、彼大ツカサニ行逢、終ニ夫婦ノ縁ヲムスビ子孫繁昌仕ル。是ヨリ又、アマレ村、人家始タルトナリ。峰間山ハ彼夫婦根所ト云伝フ也。アマレ村、今ハ断絶也。

津波のことを「四海浪」と表記しているが、シガリナミに対する当て字であろう。筆者採録の話と比較すると、犬が登場しないことが大きな相違点となっている。

旧暦 3 月に、旧城辺町砂川・友利部落の人々を中心に、津波予防のためのナーパイという祭祀が行われているが、『遺老説伝』にこのナーパイの由来譚が以下のように記されている。

事例 8（旧城辺町砂川）

太古の世、宮古山砂川邑に、一夫婦有り。恒に上平屋の地に居る。其の夫は名を天文字と曰ひ、婦は名を天保那佐良と曰ふ。一男を出産す。名を佐禰大翁と曰ふ。年七歳の時、特に父の命を承り、外に出で行く。此の時、海水氾濫し、人家を捲流して、一村荒茫し、以て曠野と為る。佐禰帰り来るの時、家宅已に荒れ、父母亦在さず。而して佐禰幼稚、倚告する所無し。昼夜哭啼し、村落を徘徊す。喜佐真按司。之れを見て深く哀恤を為し、招来して養育す。佐禰、年十五歳の時、美名草の浜に到り、海景を玩樂す。時に一神女有り、容貌美麗にして玉の如く花の如し。独り小舟に坐し、此の浜に渉来す。佐禰に向ひて曰く、妾は名は武麻按司と叫ぶ。今、竜宮深く汝の誠実を聞き、而して汝の孤鰥を哀れみ、特に妾を此所に遣はし、以て枕筆を斂めしむと。佐禰大いに驚き、固辞して曰く、余、貧賤孤寡、父母双に亡し。卿は乃ち神女なり。宜しく娶りて夫婦と為るべからずと。神女曰く、妾は命を承りて特に来り、以て救助せんとす。退辞すべからずと。再三之れを勧め、以て固辞し難し。只、以て命に従ひ、深く拝謝を為し、結びて夫婦と為る。而して旧宅に往き到り、姑舅を弔祭す。遂に七男七女を生下す。俱に成長するの時に至り、神女曰く、妾は汝を助くる為に、特に此に来る。今、児嬰已に長じ、故郷に帰らんとすと。遂に教ふるに海山に限を分つる法を以てし、海中に飛び入り、其の去く所

を知らず。此れよりの後、毎年三月の酉の日に、婦女皆白衣を穿ち、太伊久竹を取り、海浜に挿して、以て海浪を防ぐ。男も亦皆白衣を着け、船漕の貌を為し、神女渉来の似くし、以て祭祀を為す。[嘉手納 1978 : 120～121]

「海山に限を分つの法」とは、編訳者の嘉手納宗徳の「注」にあるように「海と陸の境界をはっきりさせ、それによって津波の侵入を防ぐ方法」のことである。竜宮から遣わされた武麻按司という名の神女が「海山に限を分つの法」を教えたということは、竜宮が津波を司る海神と関係づけられていることになる。

Ⅲ 八重山地域の津波伝承

八重山地域にも、沖縄島地域や宮古地域に見られる「物言う魚」系の津波伝承が複数あることは、後藤明[1999]や藤井佐美[2006]などが指摘している。藤井の採録による黒島の事例を以下に掲げる。

事例1 (黒島仲本部落)

現在の仲本部落ができる以前の話だが、その頃は、草木がたくさん生えてジャングルのようなところだったらしい。でも、そこには部落があって大昔の人が住んでいた。その部落の人がある日、海で大きな魚を捕まえた。大きな魚なので、たくさんの肉があった。

「これは美味しい魚だ。しかもたくさんの分量だ。こんなには食べられない。隣の部落にも分けよう」と言って、隣の部落にも包丁で切り分けて食べた。そのとき、一緒に捕まった友達の魚が、「何で、あんたは、肉を切られ、体を切り裂かれているか」と聞いたので、その魚は「人間様に肉を切られて食べられたので、俺には肉がない。だから、海に下りることもできなくてこうしているんだ」と言った。すると、友達の魚は、「じゃあ、俺が海に下りて行って、津波を起こし、風を吹かせて波を起こしてくるから、そのとき俺と一緒に海に下りよう」と言って、海に下りた。そして、海から山のような津波が押し寄せて来て、魚は海に流されたが、それと一緒に魚を食べた人間も全員海に流された。ただ、女の子が一人だけ、この隣部落の十三歳の女の子一人だけ、フクギの枝に引っ掛かって生き残った。その後、よその部落からも人が集まって来て、いまの仲本部落ができたそうですよ。[藤井 2006 : 49]

この話では、魚の種類は特定されていないが、既述したように、捕獲されたことよって津波を引き起こす魚はジュゴンとする例が多い。

与那国からは、「物言う魚」とは異なる以下の津波伝承が報告されている。

事例2 (与那国)

大昔、この島に大津波がありました。そのために人畜はことごとく死んでしまいました。ところが不思議にも一人の母親と一人[二人か]の男の子が助かっていました。その母親は、とどろきひびいて押しよせる波の間に、自分の子供と実兄の子供を抱えて漂いながら、神様の救いをもとめていました。そのうちに「ながま・すに」と言う所に漂着しました。此所は島の真中で、東西から押し寄せる波のかち合う所でありました。ところが、まもなくこの丘も危くなって、ついに子供を一人棄てるきわになってきました。さて、二人の子供の内、どちらを棄てたらよいか、これが大問題でありました。つまり一人は自分の実の子でありますし、他の一人は実兄の子供ではありますが、しかし自分の実家

の血をうけた最後の一人であったからであります。ところが、ついに母親は血筋を守る道を選んで、自分の実子の手を放してしまいました。それは実に人間の悲しみのきわみでありました。ひにくにも、まもなく、流石の大波も静になりましたので、母親と甥は助かりました。島はその子孫から再び栄えてきました。[池間 1957 : 64～65]
父系の血筋の重要性を説くところに、若干の粉飾が感じられる話である。

IV 「油雨」「火の雨」の話

「油雨」あるいは「火の雨」の災害によって、一部の者を除く全ての人間が焼き殺されたという話がある。まず、波照間島の事例を掲げる。

事例1 (波照間島)

太古島民漸次悪風に浸潤し、却盗、殺戮、骨肉相屠り、其肉に飽き、非行背徳の巷となりぬ。神、憂慮惜かず、恒に敬神篤信の念深かき、兄妹二人を幽暗なる洞窟が奥に潜ませ、白金の鍋を以て屋蓋したり。須由にして、油雨沛然歇まず。雨収まり、続いて火の露天より落ち、凄まじき風起り、血紅色の雲、狂ひ飛びて、島は火の海と化し了りぬ。火は三日三晩全島を舐め尽し、満目荒涼、唯白煙の立罩むるのみ。住民尽く灰燼となる。神、二人を洞窟の口に誘ひたり。地に一枝一葉の生存無きに驚き、彼れら、平生神を尊敬せるため、自から加護を得たるなりと、再生の恩を謝しける。神、二人を産石に倚らしむ。妹、産気を催うし、魚を分娩せり。其の魚は総べて毒魚なれば、兄痛く心を悩まし、神慮に苟合せざるものとなす。茅屋を造り移り住む。妹、不思議なるかな、児女を儲けたり。其子成人の後、多くの児を生み、子孫拡がりて多数の民となれり。[岩崎 1974 : 111～112]

ここでいう「油雨」は、波照間方言の「アバーミ」を日本語に直訳したものである。沖縄に数多くある兄妹始祖神話の1事例でもあるが、アウエハントが採録した話では、兄妹夫婦から最初に生まれたのはボーギという毒魚、2番目は海ムカデ、3番目は海蛇であったとされる[アウエハント 2004 : 104～105]。

石垣島でも、似たような「油雨」「火の雨」の話が伝えられている。

事例2 (石垣島)

幾年代が経る中に、人間は無数に殖え、従って互に信愛するの念薄らぎ、放肆の振舞多く、一家内の不和、争論絶ゆる間なきに至れり。最早此世の墮落極めに達しける。神は遂に穢れたる地上の人の胤と生物の跡を絶たんと心さだめぬ。されど善良、敬神の念深かりし、兄妹二人を助け得させんものと、「おもと山」の頂上ハマヒサカキの茂れるもとに誘はれければ、山自から裂け、二人を呑み封ぜり。地に天災起り、油雨七日七夜降り続き、雨歇むや、同時に天の一方より、火の巨弾乱射され、勢ひ流星雨の如く、地上一面火の海と化す。人々驚き、慌てたれど、今は事已に遅く、火光焰は天に沖し、尽く焼尽されたりしが、ハマヒサカキのみ災を免れ枝葉繁る。神、兄妹を焦土に導かれた。時移るに連れて子々孫々相伝え、火の雨前にも弥増して住民夥だしく殖えたり。[岩崎 1974 : 112]

波照間の事例と同じく、これも兄妹始祖神話となっている。つぎに掲げるのは、与那国島に伝わる「火の雨」の話である。

事例3（与那国）

大昔、島の人々は山野に生えている木の実、蔓の根をさがして喰べていました。又、海岸に出て魚貝類を漁り廻っていました。税金はなかったし、掟と言うものもなかったので、土民達はほんとうに自由の民の暮らしをしていました。ある日、青く澄みきった大空が、俄に、橙色に変わって、さらに赤い色となり、遂に紅の炎となった。土民たちの祈りの効果なく、空から火の雨が降ってきました。土民達は泣き叫びながら右往左往しましたが、この火の海から抜け出ることが出来ませんでした。島は焦土と化し、生きとし生けるもの皆焼き殺されてしまいました。ところが神のみ心にかなった一家族が生き残っていました。その家族は神のみ声に従って、「どなだ・あぶ」にかくれていました。それで無事に助かりました。その子孫から耕すことを知るようになり、又、働いて余分の物を貯えることを知るようになりました。その為に、島は栄えるようになりました。

[池間 1957 : 64～65]

「油雨」あるいは「火の雨」の話は、管見の限りでは八重山地域のこの3例のみである。

V 考察

まず、津波に関する伝承の分布が宮古、八重山の先島地域に比べると、沖縄島地域には稀薄であるという印象を受ける。このことは、実際の津波の発生とその被害の頻度を反映しているのであろうか。柳田国男は、「宮古の方では年代は伝えぬが、海沿いの栄えた村が一朝にして覆没した物語を幾箇所ともなく伝えている。多分は記録に遺らぬ何度かの津波があって、よく似た惨害を繰返したのでであろう」と述べている[柳田 1989 (1924) : 639]。八重山での津波伝承が、1771年の「明和の大津波」に結びつけられて語られる傾向にあるという指摘[後藤 1999 : 22、藤井 2006 : 48～49]にも留意する必要があるだろう。兄妹始祖神話は、沖縄島地域の久高島や津堅島にもあるが、多良間島や波照間島のような津波や「油雨」の話は伴っていない。

津波の原因を語らない話として、Iの事例2・3、IIの事例1・5・6（7）・8、IIIの事例2が揚げられる。津波の原因として最も多いのは、人間による海の魚、特にジュゴンの捕食であった。「ジュゴンが鳴くと津波が来る」というIの事例4も、関連事例ということになる。多良間島の「ナベ・カマ類を海で洗うと津波が来る」というのは、今のところ類例が得られていない。

IIの事例4の「太陽の神の怒りが津波をおこす」という伊良部島の話も類例が見あたらない。伊良部島には、オオマタラという毒のあるヒトデを入れた神酒を造り、天の神に飲ませて殺そうとした母親がいたが、自分の子を子守りしている子どもが歌う歌によって天の神に知られ、逆のその毒神酒を飲まされて一家が殺されたという話が、ある屋敷にまつわる伝説として残されている[遠藤庄治編 1997 : 292]。神を殺そうとした経緯については語られておらず、不可解さが残る。過酷な支配をした役人層たちが、神に仮託されているのであろうか。

津波の原因として最も多く語られるザン（ジュゴン）の捕獲について考えてみよう。柳田国男が指摘するように、ザンの別称であるヨナタマは海霊（海神）のことだとすれば、海神の眷属を捕獲したことが神の怒りとなり、津波を引き寄せたと理解することができる。

大宜味村の海神祭で、ニライカナイへ帰る神々の乗り物がザンであるのも、ザンが海神の眷属であることを示している[谷川 1986 : 95]。

しかし一方では、ザン漁が広く行われていたことも事実であり[谷川 1986 : 95-110]、そのこととの折り合いがどうつけられるのかが問題となる。この文脈で、津堅島で行われていた儀礼的なザン漁についても注意を向ける必要がありそうである。以下は、大正 10 年の津堅島での調査に依る折口信夫の報告である。

旧六月中頃になると、「うふあまのをがん」をする。男女に係らず、村人十七から六十迄の者は、皆仲のお嶽に最初出かけ、願立てをして、其処を立つ時に、煙草を集め、其をまぜて分ける。其をめいめいに吸う。ざん即海馬を獲りに出かける。とれる迄は、幾日でもかかつてとれる迄漁する。とれたら御礼をして、やじり浜（後の浜）でをがんとし、内臓を喰べ、東のきが浜に持つて来て、組（十三組）々に分ける。其を煮て其汁は、家々から飯を持つて来て、（入れ物に入れ）吸う。男は皆呑みに来る。（其家々の人数）十名なら十名（分）五人なら五人（分）よそから来た人も半人分わけてやる。ざんの目方四五百斤もあるのである。肉はまづ根人にあげ、御嶽々々にあげる。煮る薪はお嶽の木を使ふ。（略）頭の骨は、祀ることにしてある。「ざん」を最初にとつたものは、煎じ汁を自分の物にする。[折口 1976 : 158-159]（原文には数カ所に？印が記されているが、引用では省略した。）

肉を平等に分配しているらしいこと、よそ者にも分配していることからして、ザンを海神からの授かり物であると認識していたことが窺われる。ザンを神聖視しつつも、儀礼的に捕食していたことになる。

ザンの捕食が津波の原因とされることに関して、谷川健一は「ザンを不吉なものとするようになったのは後代のことと考えられる。なぜならザンの肉とってたべ、あるいはザンを先祖とする人びとが、ザンをみてそこに凶兆をおぼえたはずはないからである。むしろ強い親愛感を抱いたにちがいない」と述べている[谷川 1986 : 99]。ザンの捕食が津波の原因とされるのは、後代の新しい伝承であるという見解であろうか。検討を要する、今後の課題と言えよう。

最後に、「油雨」「火の雨」の伝承について触れておきたい。火雨塚という地名に指目した柳田国男が、以下のように述べてことに注意を向けたい。

中国の田舎には大昔火の雨が降って、住民が遁げ隠れたというわずかな塚穴があったが、多くは崩されて、しかも地名でないゆえにその伝説も消えた。ところが東京近くの埼玉県各郡には、塚の名や小字の名に火雨塚ひるまつがまた多い。すなわちノアの洪水のごとく、世界共通なる天譴神話の痕跡、少なくともかつてこの土地の者だけが特別の庇護を受けて一般の災害から生き残ったという伝説が、かなり広く我々の中にも流布してそれが消えたことが察せられるのである。[柳田 1990 (1928) : 204]

火の雨の伝承が、天譴（天罰）神話と結びついていることの示唆である。それを受けて八重山の「油雨」「火の雨」伝承を読み直してみると、柳田の示唆する通りで、いずれも天罰による災害で、神の意に叶う一部の者だけが生き延びて始祖になるという筋書が共通して認められる（事例 3 は不明瞭さがあるが、「神のみ心になつた一家族が生き残った」とされているので、この理解でいいと思われる）。津波伝承との相違点として際だつ特徴であり、興味深いものがある。

なお、「油雨」「火の雨」の伝承が、八重山地域でのみ確認されているのは、海底火山の

活動との関連があるのであろうか。

〈註〉

- (1) 佐喜真興英は、この話は東江長太郎から聞いたとし、東江について「此の人は三十代の元気のよい青年で三世相を業として居る。琉球の土俗伝説に大部精通して居て、沖縄本島中の宗家の系図は殆んど全部暗誦して居る。職業柄大分主観的性質を持つて居て、その意見には服し難い点も多いが、材料の蒐集には決して主観的分子を混じない。私は彼を伝承的説話者と認めて差支へないと考へる」と述べている[佐喜真 1982 : 231]。『南島説話』で東江が話者となっているのは、100話中10話ほどもある。東江長太郎については、金城善[1989]も参照のこと。
- (2) 昭和7年に「物言う魚」を書いた柳田国男は、沖縄の事例にも言及しつつ、「物言う魚」の説話が日本の広い地域にわたって分布していることに注意を喚起している。
- (3) 仲宗根政善は、津波のことをシガーリナミーというのは「潮干れ波の意か。隠岐や鹿児島では、干潮のことを『しおかれ』という。全く意外にいノー（内海）の潮が干潟になるまでひいてしまう。ふだん海底に沈んでいて見たことのないムとウー（岩礁）までが、干潟にあらわれて、潮はパー（外海）の方へひいてしまう。かつて見たこともない海底がひろがって見える。この異様なしおかれに、人々は不吉を感じたにちがいない」と述べている[仲宗根 1995 : 191-192]。

〈参考文献〉

アウエハント・コルネリウス（中鉢良護訳）

2004『HATERUMA-南琉球の島嶼文化における社会=宗教的諸相-』榕樹書林
池間栄三

1957『与那国の歴史』（自家版）

岩崎卓爾

1974『岩崎卓爾一卷全集』伝統と現代社

折口信夫

1976（1921）「沖縄探訪手帖」『折口信夫全集16』中公文庫

遠藤庄治編

1997『いらぶの民話』伊良部町

大川恵良

1974『伊良部郷土誌』（自家版）

嘉手納宗徳編訳

1978『遺老説伝』角川書店

金城善

1989「解説」東江長太郎『古琉球三山由来記集』那覇出版社

久米島西銘誌編集委員会編

2003『久米島西銘誌』久米島西銘誌編集委員会

後藤明

1999『「物言う魚」たち-鰻・蛇の南島神話-』小学館

沖縄における津波と「油雨」に関する伝承

佐喜真興英

1982(1922)「南島説話」『女人政治考・霊の島々〈佐喜真興英全集〉』新泉社

佐敷町史編集委員会編

1984『佐敷町史 2 民俗』佐敷町役場

谷川健一

1986『神・人間・動物』講談社

多良間村誌編集委員会編

1973『村誌たらま島』多良間村

多良間村史編集委員会編

1993『多良間村史第4巻資料編3民俗』多良間村

仲宗根政善

1995『琉球語の美しさ』ロマン書房本店

藤井佐美

2006『『人魚と津波』の伝承世界-南島の『物言う魚』をめぐって-』『奄美沖縄民間文芸学』6

柳田国男

1989 (1924)「島々の話 その四」『柳田国男全集1』ちくま文庫

1989 (1932)「物言う魚」『柳田国男全集6』ちくま文庫

1990 (1928)「木思石語 三」『柳田国男全集7』ちくま文庫

(あかみね・まさのぶ 琉球大学法文学部教授)